三韜妖婦傳 初編

Gôkan:(No. 071)
Santo Yôfu Den.
Book 1--4.

へ13
3787
1

Gôkan:(No. 071)
Santo Yôfu Den.
Book 1--4.

物語 三都妖婦傳 初編

へ13
3787
1

Gôkan:(No. 071)
Santo Yôfu Den.
Book 1--4.

一陽齋豊國畫　初編

三都妖婦傳

笠亭仙果著述

へ13
3787
1

叙言

三國の人主を惑亂せし妖狐の活ては東三條の社に化粧ふ女の嶽に鬼神なるべく等しく暴虐なる雜談に優劣は稱賞も有べきものゆへ恨る事稀もいとゞ化物と鬼を且いさ風凰獣麟の如く古来祥瑞とする九尾の狐を惡獸とし近衛院天皇の御時代に

風説もきこうね玉藻前といふ女を投化し化皮先
年義堂和尚玄因放言質屋庫おとぶ見弘
しそも恵[illegible]しうり脇正史を演者よいのぶ其尾を
匿ひべきに其尾潭を種まるぶ説唐糊口の吾
等しの仕出天竺震旦
皇朝を平安城寧樂猫倉と豪強附會
ふればさそもや方底図蓋しの十ゐ九つそ出

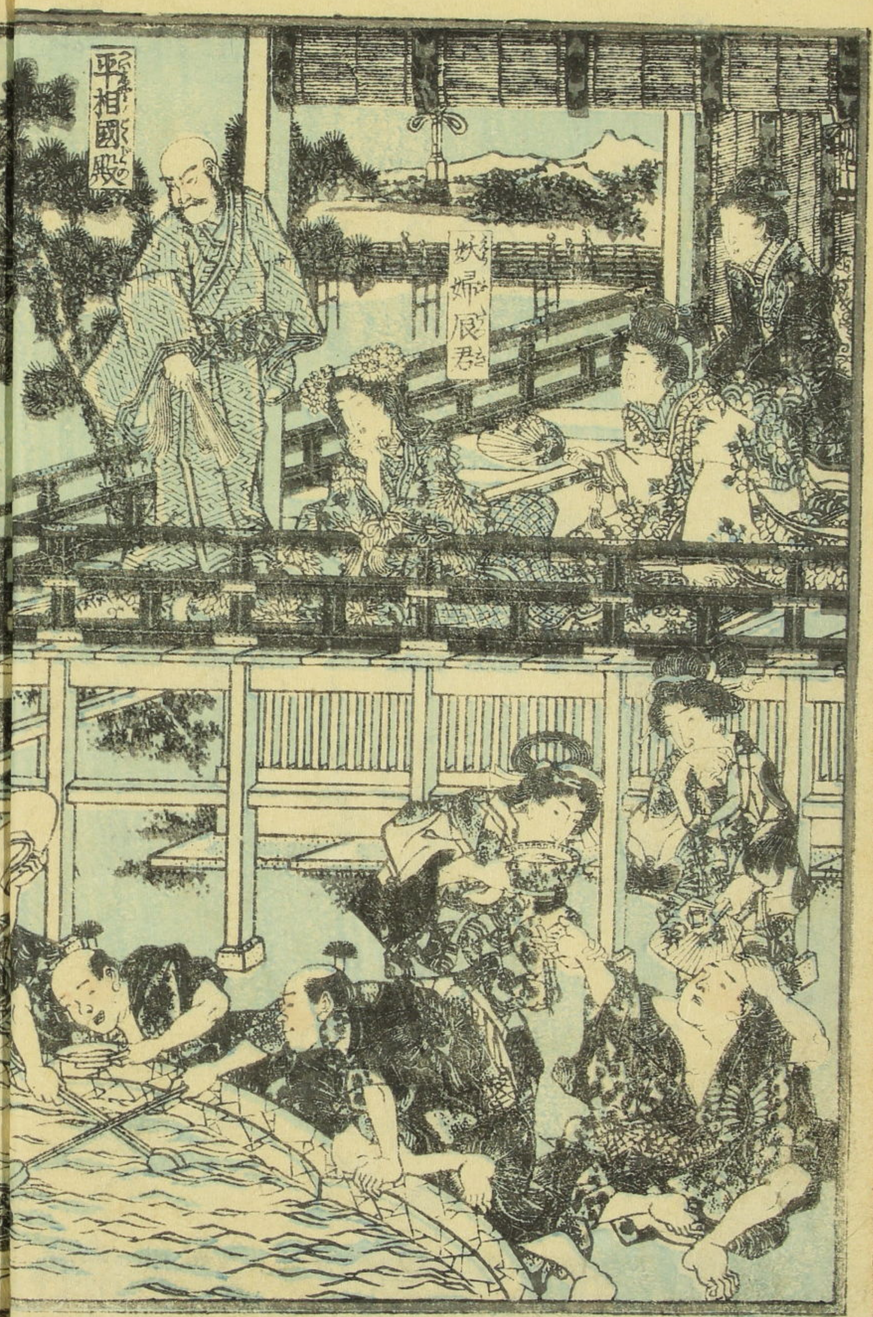
この九尾の物語と看官一笑を志るなり。
さらしそそ見棄ふかく

茶永五年壬子人日前一夜唐土の
鳥を折もやん蕭を洗ふ水の高硯み
灌ぐ

物の本のまき

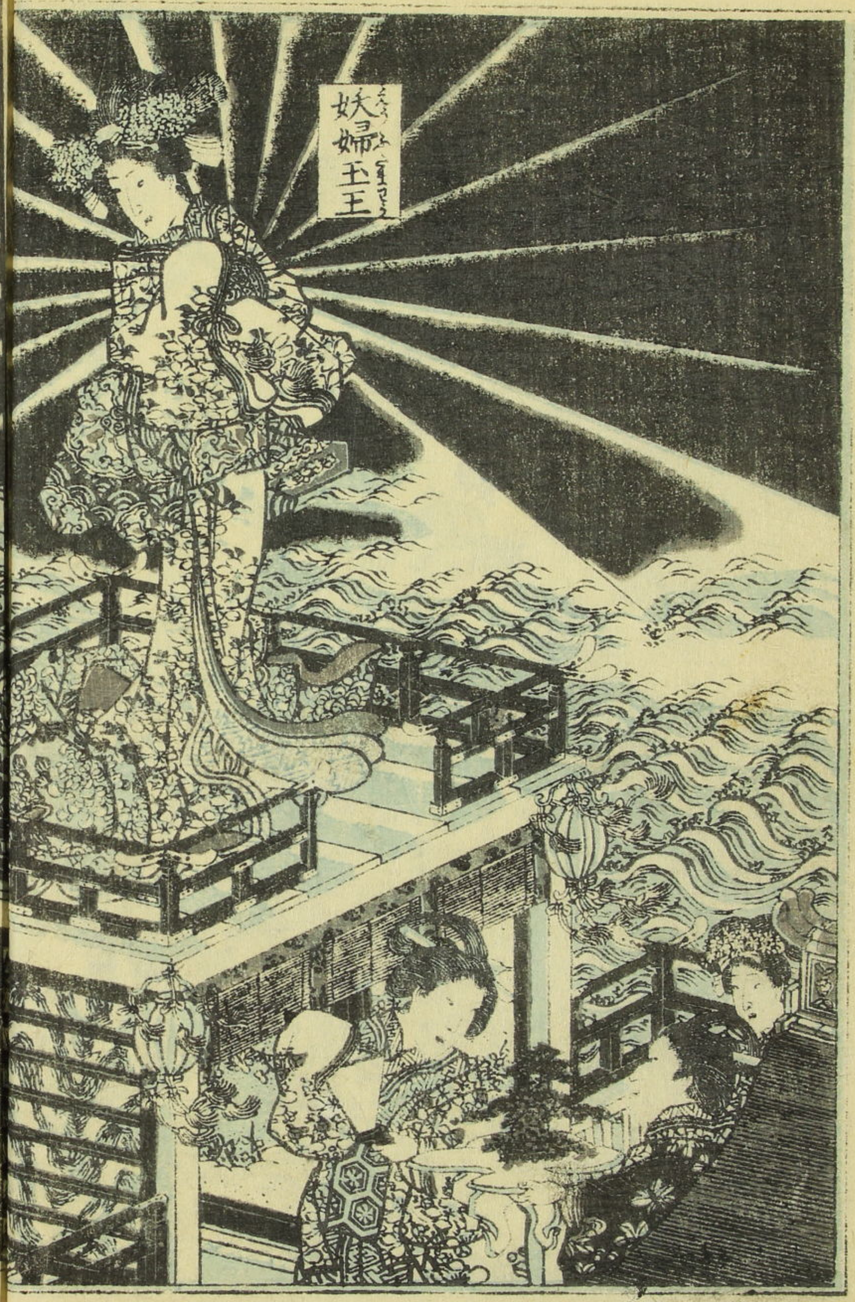
笠亭仙果戯書

大政入道殿驕奢の酒池肉林之圖


平相國殿
妖婦辰君

市守長者
橘諸周
妖婦花
神醫丹波安頼

鎌倉新将軍
源頼家公


妖婦玉王

初編目録

一　回　斐端蓮臺野　おりしろさ色ゆハそえぬ芭の郎
二　回　近衛河原　雨やさあと能ゆもつ甲よちり海石榴
　　崑陽驛　あぢさゐと御器よりこぼれ出る花

此一小冊ハ原合巻の草冊子ゆゑ刊行ならりけるとの事ふ製ゑ書ハ文脈も語路も改書でハあれ愛しかるゆゑ例のごとく板元山本某類ふ斐兄の期と忘れ其ゆゑと許さるが舊稿の海内也惟假字のまかきやーしるゝ過半漢字ふたりかゝ悪傍假字を注ーー読易うゝーむ十ふ九俗語ゆハ適当の文字有ことのきゝ文盲不学の早仕事よく叶ふ字も知らぬ忘れるも芳居ぞるあまき假字ゆて書すゝと思へば来学有の自分極華ふまのゆゑ不躾歳そのつゝ過ぎが笑の種ゆうて興ふるりもまゝ

三都妖婦傳初編

斐端蓮臺野の巻

笠亭仙果戯述

平相國清盛公。年ゆくあつけるゝ。継母にゆくまを。御父忠盛の絆ゆもゆゑ。係者ゝ中御門家成卿の家ゝ身とゆを。曹司泥ーゝ武芸学文をゝうく秘者古ありーぶりゝ伎ふ上をまるゝ。逆命のつゝのゆ。立所あるゆを。それゝのゆハ和のめぐゝ。佛の利やゝふまくハゆゝ。学文の師とたのむ。上品蓮臺寺の阿闍利。ふがーのゝ見ふまゝゝ。五大明王の法一ゝる。大威徳の秘法を傳授ー。酒をたち滋味を含せ。なゆゝ勤行ありしがゝそのゝ

頼みてけるこゝあり。齢も廿余とこえくれど。月のまゆゝもあらぬ。後世
その身もいやしくそまづしく起卧されけるを。一日かの草を盗ちふ素行あるふ
ひるとあり。めづらし。瞻くとまもふ野へ。煙蓮華とよび。頃〳〵も秋の
きぬ。草とびあはるく美味なるそあ。芳宜もいろづきさまぐの野菜
を今ひとりなる色よれ花をあばとふ。外ふくのとりをかゝえの
菜のまげこゝ大なる。狐のうまく。瞬あり。清雲ところふあるのやうに七
年ハ佛道の。者ども。ふ武者門ハうちすてゝ。さぞく。腕もをり
つらんさゝを。花頭のるこゝふ。貴公をとて。行雲氏。武ごうを武士
のつをとてを。君への不忠父への不孝。のでの狐とをひとゝ。一筆
ふ射かとゝ。父上の見素ようをうへ。時の花おどきのみやげにあらど。

かゝらを貴美ふあるうゝん。と胸ふうるがよういの弓矢ようをゝてうら
ハ父人。後者ふのひつけ追まれば。狐ハたちまち目をさまゝ。延ゆく後ようゝ
紙ひとをまゝ。地まを搾ゝ高清雲をまでふまうてをるさんとを狐
ゝうしろ紙ようう。道んとせゝも。戎沼ゆや。ひとをゝをふ練綿ようゝ。
あるこゝ裏美ふ。ようけゝ。まゞ〳〵ゝ。まゞらく猟師たゝ人。聊ふあるふと
ようひゝでめ。立ゝる道者の不。清雲ハうんゝゝ播市君ぞの。せろ
かく想ゝ。ゝをゝ〳〵ぶり。試業の矢の一百。愚人どもを化ゝまゝ。
をゝふ能ゝすき野狐。殺生とゝまゝ。めらゝ。境内もゝれゝあり。でめ
らゝゝ人情あり。あゝ〳〵ゝうゝを向くあゝ。その子子狐のゆゝ人ハえ
ゝを。あら後ゝちやといゝの面ゝく。市君ハあちゝのゝ。阿闍梨

平清盛

橘市若

たゝりのきたりちりうを怨とれんざのの
平清盛ハ弱冠時蓮華野ゟ老狐を射んと
却て狐神と祟り狐福をひるゝ源平盛衰
記ゟ如ちりそれをまゝ用ゐ一部の狂言とす

さるふるうとうまれば。貴兄ふ兄とて生まるせれと。おの子。曹司で下を
あまち。ふるうひ学ん中よくして。兄けと。あの人。内外のたあふつるいの
と。まうもべたや。あんまもあるせあんどく。父。緒枝へ勅勅の外のう人。
の都。ふかんれまを。ようへを僧ふもをとうしこたの遷。参ちふのをせられ
て。。出れのあろへ曹てあく。一下くび家をおとしこたむへ神仏おとの利
やくこの外あんらく家を富し。名をう多いをとをきいむるへ妙。青炎狐
天王をへのうべしと師のものかうり。うけたまるうり茅事をさしあれ。そを
よりまをふことをげるどかの天神とへのりの行法へ。あれを祈念け最中。
貴狐天王へきろ四神。ふるたろるくふきうりへんうけしをろうかの
ものへ。毛のいろ白く。尾のさたの。九ふさけうるへくの狐。ふあうを九
尾の狐のあらるを。天下たいへのをおさう。若王のさくを。獣ふ。これるあり
と。陽。慈園白虎通。呂氏春秋のたぐひ。漢のふへふへうもらをあんをも
知らせたまへべし。彼ようや九尾ふるをでもよのつをうをあやしたけものむをく
と殺さんより。ふうちをたまけ行。春あしへつひ。ものをこ。あうせのみちひしくき
たまうねとやあらんきうべうらへ上るへようとうもたを獣あまり功
績ふるりあせしと。綸言をれば清盛へたちまちふとうをかへ犯らぐかを
あらためて。足下のいけんをとくせう。げふく狐へあやしたけものの仇もせるを殺
さんと。あうとりへ我をとうるをどをとのうとうもふ。多へをとへのう猫徳をなりへ
まをふさうらんあやまをりくと。馬ようりをうづくまり。壇上再洋陀天灵神。それ
ぐ眼あるうう。神物を看あやまりぬ。ぐたへのつ。を猫ぐうへ。ふるさせ

へとなるをふむるに泥ふかもしひとまりつけてらくびもうびとさくふるゞ向来の富
貴をかのこと片時ごろり一心をとらせば市若もまもくふらんこの卯とむすん
院殿尾とをるへやくとたうをまかゞふ忽然とひとりの女そのさまけだく
らくく風ふてけづる柳髪ひさらくと角みかゝ水ふうむ月明
やくごとく威徳をみる。やまふき色の海衣をひらこと絞をかゝ
かけ。宝珠の玉と宝鍵左右のるふさげりの。ふとりの人ゆをあるれ
ける。都をあらせそとをそろへらるる人ゆをあるいまたぐと向かれがあると
とうもこゝろ「市若ゞてどろ市若まる。我とを七十に道のつる「貴狐天王
ゆをあるかとひまふ〜かゝとうやまふ二人「ようろく〜市若の齢ふ
仏ゆをあるとろく〜。家さんとうの大をうん。感まるゆもあまりの一旦をゆ

ゞ〜清盛のたちまちこゝろをひるがへし。系を信ずるとろぼ。まのこゝをも
あるべくふらんや宿世ふ徳を猶。のこともめでさき果報のやらく信
心退猶せぞいとをとろざんゝふ寝をひゝき官位昇進をろのまくいき
ゆ人旭のごとくるらん。まこと市若ハ来年のまふらくゞかりあるさのをひ。
あるさいとうちをふあり。あ人所猶まうゞもせべつぶためふ宮居を
さゞあ。伏見の稲荷のう人をこを神とらゝくゝとられよかゝと久いふこの
いかゝらをあるこゝ。あるせまゞもひるふるも。日本国中ふるひけるき大社と
らとあるいうん「あるこゝぞ契約ふゞまゞ。たゞゞさゞけゝさゝひもつぶゝひ
とゝりはべゝ。さゝゝくゝとりふかとなる人ゆ神女のまゞゝ雲霞かき消をゞ
とく失ふけり。さるうんまこゝもそのあこゝをふゝゝとゞうとびらさゝかふ

平樹二少年狐寶をぐ感得さる
貴狐天王
さとよの
源美朝
市ころ

奇特をこうむべきとぞひつて左右へつうて脚のと市
ふ宝珠が「市中の縁」とあちこる実を
見宝「神体」とあ いのるべ「利やくふりくせんあらば」「天王のたまもの」「越後の
清盛のうしろよりのとらまへ。
あどろきて。何奴なるぞとあうえれば。市若も見とつけて「おのれわらやしれ牧
童ふ田名五郎の子たけもる。と刀ふりとかけ結ふ。清盛こうこ
ちる。獲さうるくそうひる。彼うちまもてまこあどろ。維うとかの人ぐ兵ぐ
義朝ち為義ふふうとそうき。それふ効者せらえ。くさりとまど
おちぶれ云。源氏の名とれそのざ見。ざうくあく新ぐ。あるふの
玉がわいのう「との縁ぐうらやまいふ「ぐくこれ腹ちぐのれわられてと

可笑し。父ふもそられやせ馬ふ。食ちるまぐさもあとあろ。前ぐふこん今ふ
もちぐくたまひ。武士道をぐうやうとまれぬ狐狸ふだまされて開運を
いのるとふ。それとそわんふ稲神。おめでとかめでこんとこ。珠とんあるふたふ
る養蚕ふあうこ蔵のふるえぐ。それてあるきのぐくき。源平両家のちるこ
ぐ。性根とつけてあんせくさ。ちろと者そこ。こんるのいわうるこ。
縁も宝珠もうそひこう。ひとろふ地上へあげつれば。ぐ。ちあこうと清盛市若。
つうこかれぐあぐこうひまぐさこうぬうおまこうしやと分とひれぐまこつけ合。
二人をあひてふ義朝。まこもるまぐのぐこあぐ。ぐもまこもあこうる。あやしれ女の
立ちぐる「かこうが殖ておのーろいまづ番生こうたけのかふ剥でくれんとこびかれば女
のかこちふ陽火くいるづまかるこ入迫へぐこるこふあこうれ。こもの義朝術計つまこつれ。

てたのらきつだおろう。ぐさけひまゆと清盛市若。たゝをとりあげ今のちをう〜〜。
そとふるゝ〜ぐさりませと。のひつきゝと立さるあとふ花麓くる義朝ことぐたて
あくりどんまつ〜一のくゝや両人のかしりつ。のやまぐむろふあやゝ九女め。色ごりふせん
と引結きばんるゝくそらゝりまひさる。雲ふひらりとこびる女。ゑむ八幡大菩
薩。と義朝ゝろふきねんゝて。雲まを目めそふ月つる。孫ふ女ハ初さひとき
られ。呀とさけぶとんえつるゝ〜ふる狐のかゝちとへんゝ。砂けむり目眼をくらを世。
南のそらへとびさるを。るヤ由まあねく義朝。こゝうとゆらんでゝうるゝどりうゝて
(白きかゝる。かそゝ九女ハ九まゝる。風ふりきゝとかたあらせ。ゆゝりとさけんとて。ねゞ
ひるゝ〜義朝のゆくとゝおゝりあやまゝて。つまゝくゝるけゝさゝるゝ九きゝ。ゝうむく
目さきふきゝらめく狐のあゝそゝ〜ゝる。りめとゝまゝゝ寄ゝ。かゝき

ゝけるゝだそゝくゝひゝ。ゝ。あゝ戴きそゝゆきゝゝだける。
ゝの婦人ゝるふゝのゝ。数回のゝち紫陽花ゝ。ゝ。ゝ分解ゝ。これゝ
ゝ源ゝ二位の息女。二條院猴波と壽羊女ふあて。頼朝と周文王ふゝゝゝ。
ゝ国妖婦傳のゝりけゝとゝゝ。このあひゝふ保元平治の大乱ゝて。義朝ハ
尾張の野間ふゝゝゝ。その来子義經ハ陸奥ふかゝる。そのゝりゝ実盛ふゝゝ
けれゝ闕て記ゝゝて盛衰記平家物語ゝゝの人名地名と慥ふゝ共事実をゝる
ゝゝて取らゝ苦心ハ次ゝの巻をゝて察〜〜ゝゝ〜〜

第一回　近衛河原の巻

源ゝ二位頼政卿のゝとゝ。ゝ。猴波とゝゝゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。美人のゝゝふゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

處女園に狐宝を得る

義朝鎌を投て狐額を伤る

蒲ひきそやうとおもふて。門より。めつらしき綾女のまへの。後ようまん
らをこれがそのうつくしきをみさらるる。父うへに宣旨よくよこうろの
あそこころざしをやさしく。今年さぞふ十七歳さてのさえたちたるふ物の
ゆかしとそくるやうなりこの綾波まことの名ハ辰子まことの辰王とふ己年の縁生
るとあのあやめものこりなりこの幹夫とあるすでにハようふ陰陽師の
ひとりふまうせ業ひとりぞ。しんそのるも辰とそつけるこの業ふるりける秋のこの内
裏ふ秋の作ものあり。とりて新波やまひ和とそのおとうとしんあやめい
とこるる辰王とおそ。清涼殿ふまゐりと帝いこの子のあつしをふくめども
やあまり。所ひさのとふさてかれのあまこのるとりて。綾波国の宗徳天皇
こと世ゲ和ど不書写しる。仁和ちしんなるふ法華経をまこと仁和ちしん

とのとれ帝へれこころ申上辰王人もひつけぬふ御経の内をとこうて
おまえふ申りけれ帝ときこう感感あるそ。この五七年きぞこうが朕うのと
あそかつこえ綾波の帝のれ申あうりんぞりつぎこるえんをもつて名ともこの辰き
とこうぶべしとのくまえべ後女のまんこみやこうがるやありぞこや。辰王のかしちを
ひてさげこせこもふぬるぞくこの目のめんぞく。父より改の小とどもて君のゆぐこそ
ちんのどやせこるこれちうちうこうこそめべ後ふ帝へれこちまこれず。乗ア元年
おうせこそのこ二條院とかくこそまこるこれふよりて辰王へ一日のこみやづくふはこう
まこうれこ来代まこれ二條院綾波ふちよぞこ春のこふ桃山茶生動。二年春
とこうこやこ男頼政のこちこ辰王ふ綾河こちふまこけるが窓ふくかこ申れ日の
めもやまこうへこまこ辰王ここうの姫ぎこ。裏だふかこくへまこあびぬ孫をぞれの

ふまえのこゑのうるさいちゆうをゝこゝあけん。辰君とうるさくちぎりかて。蟬小河のみず
のうるさい中を親やいとく知れる人名も由ありて増水をうるとゝもんぐりしかうぎ。
とうもあらんとそんなる。姑息愛ごろくも血のあるうんぢと子とのうち十二月のた
ゝ中の雪ありうらしからひぢの後もあるたうゝ門口のきの麦ふ立出まして。
冨うあまき傘のもうとをあひづうとーかとがひらく戸ぢその藤るさとを
ふまぎごとと歌歌のやきうそやくさびねづさいやり戸ひきあけ屏風のうぎま。
とりーびゝうき几帳のうちへ千春やうとうぢり入りおらくさむやと火とけ
のやだーふまきみ豆だーのとふ。盆石ううをてあちゆあー辰君かそのはく
なんまぢり。一間だりあひとあき。芽ゝさーひけてひぢりぢか。三千春にうちふさ
ゝ中ぐ出ちとうひまぢ。内裏と考ゝのもどーゝ御酒をたまうる僧侶やら。

らるまうやうやうぢあたけいたのび。出ふ宿出せとの勅命。それうとけいもまうく出ある
えんのやとうのうれと帝のうんけん。汗とるぐーたやうとの年。おうとまれおとかけてきて。
内裏さうふのづけいるふぐもおとれ入る。書命をのにちんぐ御のぢて寝
ゝきのいのかうう言もこ昔もかゝうまーかんんあれと言ゝけまるうきゝあとーのとの。
深山木消いぬぎゝそーし。雨衣かうるんん中。彼風いとそだうぐ笑ゝう紙と楓
刀。おちぐひぢうふとかゝうきて。この小づきい弥生さ西。ゝうるりのふさむうらと。と消
ふとうとそうちうまり「そまふ。那それ橋のまうぐ。内裏へぢうんの筆業一
かゝとぎゝんん町。ゝちまきふ物。ゝそまうゝ。ゝうらぶうう深ゝ山木消ゝひうらく一筆業い
楽のお笛ゝうゝぬゝゝまうれゝうりんゝけんーゝちうゝ春んせ。とふうゝゝとひーゝき台
ううぐーゝ中ゝのぐのて「れいまう。おうえでいうく剃刀のううゝまぐのでぐりまゝ

「それ〳〵ゆらん留でゝるゝと深山木にあらしぶき
ゝゝ円寂ぢゝらのごとくにあらしぶきかゝる。それらでもなりく
らゝこゝりのゝされゝゆゝゝのぶさゝ今ゝゝゝゝゝゝ
金石のまぶゝ作海中ゝ石一つ。それゝゝかゝゝきゝゝゝゝ
代をゝ紛られゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
浦より七八町ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

源三位頼政卿
息女　辰君姫
桃山弥生之助三千春
侍　深山木
侍　桐

きゝあげあるべつのうがまんとその嫡子。小松の大臣孝心あつく。つゝふ諫言せられし
ものゝいろ〳〵迄ごろ落命ひゝく。えぞうるくもるきさよこ紙やぶりの入道を悪
しとゞめもあり。それてゝどれ取我らのうがもみさ。まことに源氏ハまれくふのとるべきり
で人らく〳〵。語とかるるのもう。これ法皇後鳥羽の天皇のごひきつく。推とひろとゝきこ
し欲えたうんありてこ位ふ叙せられ。今ハうやれまぞろと。一子仲綱をかとふ天道
えそかくあれば別ふ恥辱もうけざるに。齢中もうちぞ清盛入道。恵えうふあまるひつ
ごのこゝおまこの美女とあつなるうへもろふやろの手囃しかむまあ辰者と美人とき。
見給ふとろと思まう。やうとうせさせ小宰相せと人中ゝて天きひゝ。おれやれ
清和の末裔平氏の彼官とるもせ。先祖より名をさんのこれ。ひせろうきうう女。
ものゝ者ゝ平王のりてあんびふ流ふ恵とりんとせしゝ。附せふつれてさもいれ。女房不
もう〳〵ひけ。あってれへんゝゝ。物とさまろてみさり。悔しさ。それよりあんくさのく
あれゝ。若労とさまるも系のさくと。ひとろ中ゝまるゝ。ひけふまゝ。ハ若ごりゝ。道系
もとけれゝ。ゆく乳もあるまゝ。さあゝゝ。ハまゝ。清盛ふ。のさとゝ。ひれゝ。
若人の不忠先祖ハ不孝ふ。方さとゝ。ひとろ。ふあれゝ。と語られゝ。綾せもとゝ。ろ
きられひゝ。ゝあるふ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ

神を奉とゝゝ。奉川ゆゑ家とあるゝ。一所懸命の荘園をとあてがはせて
のこゝろゝゝ。ふるき思ふあるゝさけの宰領。しらしめたくまゝ。義清。ところふあるゝ
けいよく。ゆせろゝとまろとゝ我ゝくゝれゝ。そもゝゝひゝるゝふとあるて。後ゝゝそゝかゝろゝと一
間ゝゝふゝゝ。なのめんあれば源五盛安ねんごろふ一孔〳〵。當代の世のゝゝゝゝ
るゝもゝゝくゝゝ。情幸ゝゝゝゝゝ。清盛への道ゝゝ
ゝゝれ。みやづゝあるゝゝゝゝゝ

ゐるひのあるとりく、をれたひぐらの紅葉のやくめ。牡丹おのひうけ〜。そぐらふのとる源氏の
あ家ハ日さうちせさせ葉をかし。根をたんけのてあくぞとおりへひとゝ不後三ゐ。
と盃とんびをとりのうふたへれば「このことをそこゝろゐれ。小松ぞの兼所のちらのうつの
ゐのひぐらこぞう。忠臣いちだけられ侍人へとゝをえゐ。のえや平氏のうんめいもまま
のゐうて火ども。今さてゐあゐ前家の尼ゐん。れ相うゐてとおさゐ〜。義のたゐふのうと
捨ともかゐうて武士とさゐ〜ひけられ。ぶこ者れもつひゐ滅亡者のこゐゐうて主
人ものあれ。れゐ人義をおひとち平氏の臭とひ〜ぐ死性ねゐゐゐゐ世ふをぞ。
ゐ人とゐてひゐ兵ひとりぶ火のさふふきそさるゐさゐゐうくもがされんまとかぎり
ゐゐたちゐれとも匈奴ふ嫁せ〜主殺者おぎふゐてハ獣不まち王の公主もとりゐられ。
犬戎国へひとけ〜ゐり。れ彼おゐの松のもたうある枝もまの屋ぞれ〜りとゐ源

みどりの毎ひとくれの色まさるどれとゐ松のみさをとゐ今げんぞふそうの木をかさして紅
葉をけ〜ゐちをゐのぶ常盤ゐぼん母をまゐとたまゐるどれと遊婦とりゐへ兵ゐかくま
で雅もかん火のひものとさゐるも時をゐそとのひさゐるたちて屋のもゐ屋ゐ氏ふ氏ふかゐ
火ひとけふをれも燃とゐさゐ「光火のもれい平家の藤ゐろ源氏ハもの白ふかぞり
ゐうゐのごとくと燈燈を雷にさう〜つ金ぞぎゐうくとゐさゐそ〜ゐむを頼政ゐんゐり「ゐゐ
うとゐりは。驕る平家の我ゐ怪腰ぞ。ゐうゐゐうゐの傳云のゐるゐぞ。あのまく紅ゐて四海の
みぐれ主上の宸襟をやもん〜ゐゐゐ。氏のゐえをゐろん。とおりへ光のゐのちもゐぞう。
忠義と孝とゐゐうせん。とおりへ女児の一人や二人せゐとゐうゐゐもとゐひゐ。ぶ
ことゐれ〜脇ぞう武士とゐうゐうゐ。ゐうへ會稽ゐの。ゐちを雪ゐんれぞうけの「さゐぞとの義を
ゐゐちかゐ主人の門ゐものとゐゐり「二言ハゐりゐら敗今ゐまぐゐ出陣ゐ兵岡ゐ西八條

素盞嗚尊を滅して
老公方寸定まる
頼綱源五盛安

源二位北の
方綾女の前
源三位入道

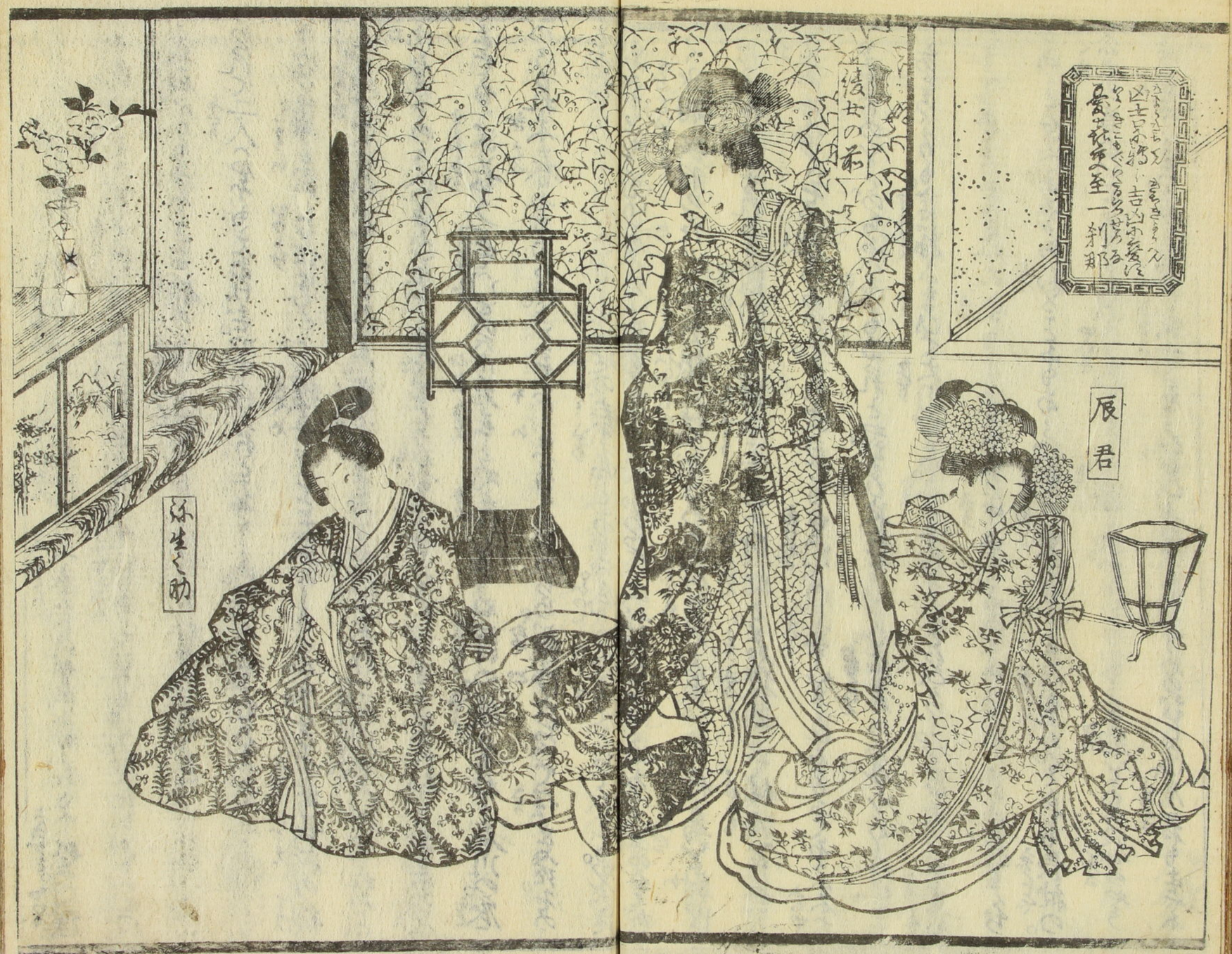
素盞のおほひたらひられん。これ、ある侍女のよろこぶ。とりそぐときてうの華を簾ごしに綾女の
まへにさしこどえ「とんるのさーでるところをもとかんるれど。桐公ゆもうもく
ろうーめさん。屋ろかいもでふあのこまり。おりひあてこえるうんと。門さいこまうこのやうふ。ぎけ
くるふさまらひん。ぎることころふ一月もみやづくぐるぐたりでうもふまれもあんぐ「あうーー
けまで若ゆもやまる。婿板露ものびさるぐこれらあるぬけかれらぐふ遠鳥けぐるのもこまハ
おゆ。二條院こそ世ふあるせ。ひび名までもつくるむすめ。内裏ふさえ奉公さるべいと
ゆーらひさうこみと。老法師の清盛づれふ。ぐさるまるけせと。まあやもしれと洞ぐおさ
へ。みれんのうげた赤面せり。頼頼ぐるまちこそるらん。と彼をあくこあゆこの供あれ。
「うるびあた老法師。ゆとけこまあうちこの頼政を貿とーんやこふるんもこうら
ま手。あとゆそこまるふらひうあ。逼うこうるおさせ。こまひんあれが婿とるこの。引出のとさこあ

あ。こう領分若狭國松永郷宮川保いぐこまでも姫のあ田券國帳もやりこあれぬ
期のかう櫃ふ。知りやるこまりいこきあてあ。姫も奉ひまるうんあの書つけのむこうあ五
古。ちうこうこう姫うあうふかるひうこれかづく孫生離きまうふりうてゆうれもせーこのとて。ぬ
そのあと。ゆ。あの五古のてそのの離をつんでまるうてあくぶようこう。孫生離ゆまこそい
ゆ手。ぬくこうーこうこうが是能もるれ。せのあくこあきーあとのひきうせそおのて
たゆ。とひありけふのひのこ。源五とこゆふ五出るあと見おこうてあやめのまえ「他ふこるる
せすあの清泉。個人ふるこうえ。男せあうれーー殿のおとこそびおるこけふぬけめこうけまー
ここうこそたやこくこひこうーまここるまく。系ごあの清盛のまーふあの児とこうこまこう
かゆ。ねいこのれこのうえ。ゆこうう女児もこ千春も。同和のこきあ刃のこうび。只得むこあ
ふこくまんこ巻妻ふゆこうここ。ぬこのきこ見つくあんーふれーーこ。まあんこうあて。ゆこの

を人領地の主につけ、ものゝまに祝ふ長持、ゑんぎものひきうけ、人ゝ所をとりそうかへ、そこ
のゆくゑあり、あけて、母とさよあんと、ふたりの子、屋ふかうるをうちうるを、ものしたぎ、
たゞしが、辰若いらと、縁女とえんつけ、おもに母さまのごとくむかへ、ふの被ふかへ、ふ
生物もたくさんあけ、ものしたぎ、うつむく、縁女のまへにまうして、「ふたりとも、
ふの母さまこゝにまゐることもあるまじ。不義みの、ほうの家の法度よりのがれぬとこゝろをきまい。
だいとれたるものもあんこのひさうず子とそいらめんせず、人のおかさいるまゝ被ふかへ、
人ゝも母がものうちふまそこにとのられて、辰若いうとびれたる「おのぶ」のまゝ、ふかへ、
のものいかゝとそるものゝ、ぶくどいきゝめてとそうまうする。親のゆくゑ男をひたへれ、さて悪か
らうが、懇恐しそこく頭うつそたまられ。とゑとあいまるを、弥生助、あつのけて入かゝり
辰若ゝ美形ふちゝ、そこれ、ゝとれ、せいだと、顔

さゝのべて、持をむくる「ろんのあるとこと殺さうとのうちあんせ」のゆくゑとうぬ
三千春辰若もこゝふ母ふそのゆくゑ、ちつはて、南無阿弥陀仏、とさゝうつむく
「をふたりともよかゝど、弥生ものゝ、ゆくゑ、ふくく、今が最初ぞと、腰のかたまを
きらりとぬき、呀とかけどゝひうめく、双辰若、ゝうまごの髪のゆひ貝とたゝうゝと
勇ましうひかをを、弥生の主人、髪きりかゝるゝまんの太刀さゝ紙をり
ぶゝゝと、麻ゝ、ぬぐひ、とゝはあやんとゝをるひぎき、扇かけくるえがあの海石榴ころ
ゝと二ゝんまぶりてまろぶと、縁女ハつんやり「八千代」とちぎる玉つゞれまつこのゝくちり
たるとゝさうもゝゝさゝあ人が首ゝとるもゝ、辰若、成敗の法ゝゝとゝのふりの、ろんのまゝゝ殺
さうんぞゝゝ、ゝのゝさうするとのゝのゝふまゝゝゝとろゝまつゝゝゝゝゝゝふゝとあゝ「
きゝれがとゝんの下髪「前髪」とゝ人ゝ壮男の数「母」ゝのゝんゝゝゝ「やゝゝゝがゝんゝまゝゝま

昔、そのぶしにもむりるるぞ。さそこ千春い不義の色りの。首うてゞ学ふる元人。今あう
うあて宮門大捕宣頼どのゝ頼山の妻のあやめうつくしあそ見参「のそれ」ゝ
帝と和とも。宮門とゝの十ゝ色取「かゝくしあるそのうそ大和のうまれ石川弥兵衛
門どの一子重頼ひすめのまゝせんとゝる男のまゝ妻はあるのそるうゝかゝとゝ
人をゝそ。ひそうゝふさぞうせそくとゝるのまそ。ちゝと半をきれて宮門大捕。のゝく新
とゝるものけぞ。後女の和さ帝うぎゝとゝそのく「のあ」手治の元年。化鳥の所為
とそ帝の御悩。かの奴要とゝのゝあやゝ元のゝとゝんそのてゞ重門どのゝ退治せ
よとの勅命。重門どのゝそのゝ使のかゝのゝびがゝをゝゝのゝひとゝろ。射そんじるゞ父犯の名
さゝ汚さんゝあくとゝ辞退ゝ。ゝゝゝそゝゝとゝゝゝゝゝゝゝけれど。一人の御悩をさゝゝあゝて。
我名とゝのゝる氣ぞるゝのゝとゝあゝぐゝゝゝゝゝゝゝ


侍女の茶
辰君
林生く助

ひふう発人こてふあるのハ後波とそ二条院の上童それ白系ふからも千鶴丸推
女房と妻ふ[illegible]千万年もひろまでう丸死ちぎりのとの
盆石ぞりもそれさま般の毒壺ひ。ちぎ者うけんのそりむすびとれうまてうんろいろ今
ひられて二人かれもえあげぞ。かすけるのことんぞりーさたぞうーそむだろうそやと雅ろる
ヤ月に用くきの古器ろくくと。後女ぞとむおちーりとぞも。とぞ金長松の桃
子。辰石ぞびちちろびぞれ。宮内もうぞうふ沙をあげ「石川孝門のせぞれぞと。
ぞんどのうんるふとちゃしえん。さることろ父も世をさりてたるこうえひとりぞ。あえん
きそるく末長う「竜門ぞのハれ死ちとやえいかろ以源の流ろれ一石川の底
のうれ木春ゆもあいぞ。さそそたかえるくありうらあ親ふおろて後生死。その
えるむとあ宗和ぞの。朋延の奉あとあ[illegible]

名とあげたるく忠実あやさ人ろくそびまりくて妻子ハちりあそことよのえんとみ
「ろ」ころ世ぞろか未来永ろくかそ安ふふとと九歳ぎーれのたあふもちそと
ふ[illegible]ぞふつそこ色。ろりませうと後女のまんさ一猫ぬきろり流ぞ「ぞう
ろさとう利ぞのろくふあるのもさんりひとの量巣とりかられ。刹カろ世ろ
あやせ。弟頼のとろふたち「勇士とよそる頼政のひすあのまが女のそうふつと
衆ゆて、ゆありかとん春をろり（てきあうせんてあうろうてなきられと義愛さう
ぞと義あうう。ぞれりはぞそ金さ忠頼の国源と舞ひ元でふぞそ和ぞ平氏「
ろされ頼政ぞ。姫の好ぞと縁きれば辰石へまうくようとびくさ「ま」もそ
くぞうふ。あそとぞうそあちづれ。とのそくまれば後女のまこうへてもまさーとむ辰
つむゆもつまれぞ。絹とろづれるそ[illegible]ぞをうあ「ぞりひあくる二人が中。れて春姫ふ

さもされば。さて焼くたのしからめ。されどもうき世のうらひとそよろこびあれいろ年こ
まろ。かく我むことをりしうる人へ。親ふひとて沈姑のことをいよのやそなれまじ。今この
彼女がなのむきさへ。婿のゆも底君ゆも。年きてでさるか「おぼせまでもいぶそ
きこせんまそふるえいのちよ。ゑんば一命めさるとうとのうたくまきまうこと
ゆくとのさうえのうみくうしまくとものくうしのうるのもきまきうとくうくうちまう。
こんれいくさのうる美人の相人のまえんれもとうるる。年相国清盛入道そうさの
きうもうときおよたれ。ゆうとうさもよとのぎうるれてもいのとのいれいこえの拾威敵ま
年にかとつけて。明とのぐーおえくまいしーぐ。おうもこうえ一門うる兵清使ふのひつけて。
かうくのなり歴史状かきこれこそまえ打とれ。とてきとおそくうびまえうれどうう
クホのとる源氏と源氏同士うちーくそのかひるく。一旦ひつともまうさうの大軍ー

よせのつまそうさへたうえ力もあるまうど。一家一門からの同されひとりのとしそ。
ひかええのうぐさきのうちそ年家にえびくうらひ。おやまのちをまうさうせんの源氏
の名とれ家のさまをみる二同ふうちあふとう。やうえ武士のうひうれど大功となるる。
へ細理へ和とせど。ひすあふみさえ流やうせ。清盛のとうとうとうる時とまあい
せそれうくへのうちきとうまあうさのあれさえせん頼朝うぐうの源五えひうふうう。
あうえうもひみつぐんのう穢彼ちうへ。ひうえ清盛のやうえまう。ひうまんどとうされさ
へうの。れりとうれうかうーいおのひうるれ生ううれ永くうきめとうをんうう。首ふーそもと
まうへどのやうとりうそれへ清盛ふ。うぐひとかとさせそ。たびふ家のなのふうう。頼頼
の源五うらうううことれの。日のまえまうんへ事経沙和底表ぐうう。一ひゆ。大せの
らのちもたきうう。家とあうさえん礎の。おうかりできるとのふのめを頼えのも潜ーて。

こむろ
宮内大輔後家の
宮川様を領せ
東海小町見わ
石河秀康の子
弥生こ助実の
石川宮内大輔
こゆるぎ木
あやめの木
辰姫呼名
後家ぶこと

つれてゆくの殺しく死ぬ。どうぞ[illegible]けん。かるうだ[illegible]てゆくまで。とく後波
法やるもだうを清盛のめうけのせんとけそうそ。まりみぐるもせさ[illegible]ふ。きぼうを[illegible]と
そぐそあげがやくたりのようそあひが。今そのかくて身のあこ十人をこのさやあううかく
るうき目とあをもせて。せひもるを花世のさるや。と辰若のをとうおせ久。後女の孫
ふこうつそ。姫も不貴のるこぐふこれ身もうくたりきたりしが。ふとんげほ。まぐさ
を[illegible]ひうるそてゆるる。みづくうも[illegible]ぬ。ようきけそとうまする。手頼さるの思
ひ。おさうもたうが父のため。家のためゆゆ[illegible]られぬ。とうあ[illegible]清盛へとあ[illegible]
るれあつひ。手頼もこれせんよう。これとおうひかれとなるひ。妻とそたそねあるをと。あつき
るこぐをのこうみつ[illegible]大義のためと姑の幸をとうけてのくきふのまう。平家をまぐうま
一ツのてぐそ。のとうりれも源氏の一流。ろうびそまれ愛ふがれぐさまうこげるとせん

とうふう。たぐひふひのちふ別。妻ろくうぐうへてぐふあるうへべ天忠孝とあうれくあひ彼
猿再団園て。今のるひれをもりーがう。重長のも中うの落と花一ゆうふ。てす日
ふうくぐやとうのこさだ出えのくこみれんとうるぬも男の忠北[illegible]今さうるこ身ふ
婚姻のこうぐれこさもるるすひふ。ちりひのたれこへりうぐうせそ一度へ親ひふ。
えんの妻まへとのおこさ姑とうだを親頼ふ。むをあふおをうをきるんこをとおりうて
[illegible]ふとうふもまぐこさて中。その疾るれば月るふ間もあり。あをへかるこへ中
姫ふ。ろうくるこうる祇とうまれよ。妻もあぐーまぐうまんうりうれも。心みぐく。れう
けんるをーるひる。縁波もがてんうくとうのこうくたるのこうきちぐう。ちりひやるぐたあられうり。
るへて同門の池の蓼蓼。玉藻の床のうきちぐう。ちりひやるぐたあられうり。

第二回　嵐陽驛の巻

平相國の御生賀のもよをしとて、ふたりをもよをされしに、
みなこれ〳〵のまうけをもつとめ、執念をふかくおもひければ、実不中けりとぞ
つたへるめり。さてこの頼政の息女の辰姫、ゆゑなくして
もちひとこの頼政の〳〵ん〳〵ときて、今〳〵ころやはとそ頼朝をいとつらく
のごとく、武士とやうふるまひたつぐの朝むねの武士ときこゆ。そもきけふもらまぐ
まぬ。霊とゞめ、ところ〳〵。青ざめさんもあるこゝろ〳〵と十里不あまる津國の福原の
荘をうけ、下やくとして、銭のおもてをうつ。光こゝろ平六家長、雅波六郎、嫁尾七郎。
三百人の充童の中にも、師清、麻呂とて、妹尾が一子とて、さいとして七百人あまりの
者ども、平大納言時忠卿、公達、衛門督、さいとうの武者、のあれこれのつぐね、舞、
白山、しかぞく。そのゆゑ、あるおもの利益、後徒車とうらの鶴とかけり。

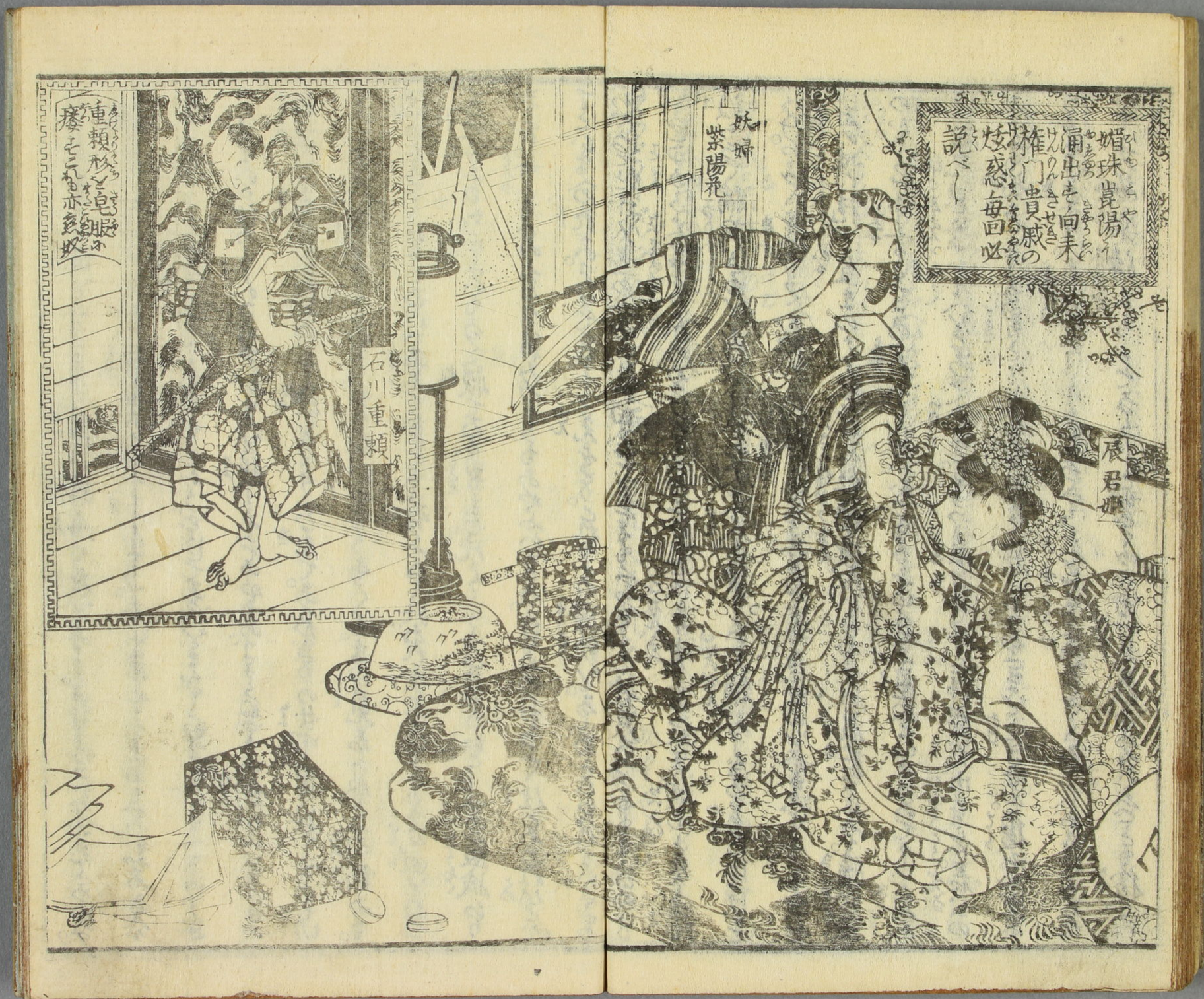
辰姫も、福原へ、ちりをはらと、命じ、津國、さいとうのけいとけさ
めさせ、天子の行幸にとゝのへ、東河の家、そのよもあどをくあけ、平家
よりむかへの武士、つがへ〳〵入来るに、あやめの日、今日、日のべを、清んぬ、そもそも、
一方、ゆゑ、ことあられ、まゐ殿のあ、分のきづ、〳〵く、〳〵く、姫と重頼、〳〵、けてかゝ、
ゆ、げ、こゝ、なるもかれも、こゝ、ゆ、あげ、るもあ、ぢ、き、ゆ、れ、や、こ、れ、の、う、く、こ、泣、て、も
こゝに長扉下東とゆ、ゆ、こ、たちのゝ、こ、ゆ、こ、なる、ゆ、こ、ゆ、の、う、る、姫、ゆ、こ、ぶ、ゆ、あ、り、
ろ、こ、の、ゆ、こ、ゆ、こ、ゆ、こ、て、も、朝、ゆ、こ、ゆ、こ、ゆ、こ

改ふたくめん。ふてびるまこぶ。れ三。頼政の母うさ。れ七。これより。おや子まま。西かの
こがちふこうまこう。辰若いあまこの武士。ものふ。ものかとまれてつこうる。ふ不マこうれ人のこちらく。
羊のあまこひまの駒。駒鳥北風のかうこと。ふおりひあ。そて。のれ。ごうこ。絵
鳥。鳥羽の観。もあとふこと。郭をたれ。山ざ。八なこ。ろ八さ。ふのそ。ぶなこ。ふ
とそ人。関ケ原の。つら。ら。ふこう。ふ。あこ。川瀬川の。駿。水ま。こ。九。投。れど。れ
どろ。一日。ふこ。ぶ。れつこ。これ。やこ。ひの。洋。国の。ゆ。野のまく。ゆ。つ。ふ。ける。ふく
原へ。ぶ。ご五六里。り。かそ。そのよ。つ。び。ぶ。れ。ぶ。この宿。やど。ふ。入。ぶ。ぶく。道。つ。
ま。と。や。ま。ま。寒。ま。ま。あ。ぐ。侍。丹。の。ろ。そ。く。雑。子。の。や。き。と。り。鳥。貝。の。鼓。楽。と。さ。る
る。に。上。下。の。武。士。ぐ。く。酔。と。ろ。ぜ。ん。ど。も。と。れ。て。う。ま。く。ね。む。さ。ま。ふ。正。雅。ま。
ま。け。ま。辰。若。ひ。と。ま。ふ。夜。の。あ。と。も。ま。こ。ま。さ。ま。ご。ま。目。も。あ。ま。ぶ。か。ま。ら。ま。ま。れ。ぬ。深。山。

未。枯。も。ま。ぐ。さ。ま。ふ。て。こ。も。ぐ。ふ。と。ま。ま。く。ま。ま。ま

死さくる。あるあれはうきあとをとろされて死ぬるとの身のれどひれどそこさいのぐいうるのめ物
そうんとそ入とこ。かなさんこうるふいあるあるめうる名のてれどろう。自はふるてころさ
まうる。あ凡とそれも織騒ふむくつけるゆうる男とたるひのわふきれいるれすゆとふさびおどろに
さーのそけびるちつへう辰君のことそぶふ。毋めものたやひ好「さアロ」ひとふとたふさ毋を
嬉ーあぬびの。左右へひうけが辰君よる。一信まされる女のかわが毋殺れとふくむ眺
も笑ふまるるふまるらく「お縣さんゆおとうく。孝ー山そまいひとまるらぴ毋て殺
きもちろとハ横徳。ふふとあくきうとの宮うらあまう隔ふ夜村ろふ。まづーのあくさと
ハひすゆ。名ハ紫陽花と申す。自負のやうるまど。こ平二満でくないきアやう。
めうけふ少きの遊女ふ貴て。あるせとさきのとふさ親ハ金のるる抜のつりである。
るやど外ぶんゆ怨のこうろ人縁をとまれてハ泥脚年後の自耕自食のまさと

いやうとと十人並の女とうまれ田舎でとてるもちろとく。若男のつとめもまこいるう
毋色るるう大名るる家のゆけうるバやまけれどれ年妻とられる幼わと死ろう縁
殺あて稲荷さゆとちんぐーかの大生人うひうーい大頼ふ。ぎのう毋のほけを
うけらく。家づくりあやくの勝しそもあるやきもさまるハとかまへてとーの十七
宿の博徒ゆ貴まのうる色。源と位頼政のおゆあうさんの辰君とらふゆ清盛ろ
のあるけふ上るとそこの宿ふとんやハおこまるるそのう毋ふ見ゆとひときのてうう。ゆ忘ふ
ゆとゆが一思案。ちくへとうゆて入ろう。ゆうて辰君でいと清盛公へれなゆ。君公の
ゆうふも好色さうる男とこれがいろぞだまー。たれもあうまと上させゆ殺そんぶんふ
うゆまうる家まう。自殺きうぶふおうろうる大名るる家のあくさゆるうゆ。めけでもそれ
ハ十ぶん極楽浄土もまそるうゆとゆうぐーのうの一見とびあるいまどとも彷ふハ


媚珠崑陽
涌出き向来
権ー貴戚の
炫惑毎回必
説べし
妖婦
紫陽花
辰君姫
石川重頼
重頼形と皂服
瘻そこれも赤色奴

ある。酒をもらう酒とのりとえて。夜ふ潜居で夜とあ〜。さわさとらくてわさいる。
お姫さんかうあさりのと。髪もあんあふる。あまぐ。あしきあうんよいわもは。おおわさんが
とぞ。ないとさそ女中。毒がさうぐであらう。ぐしてそれとまぎらかすと。おまくもう〜ぎ
でるまいが。むぐ〜いさんあの。おまくと殺しくそのかれのこうろぬやうふ剣とつけ。と巨の
衣服とまぜておたそのあ紙とうとくまそ。あるかぎりの女中。毒いぐくうぐも切
こうしのこうれ武士ぐめう。おまくのかやとうきくも。まぐ見あらぬと。過剣ふも。
酒のこうぐうてあれば。業てあいても若ふるだ。あれをふあるまもう力血とぬつ
て。遅るふのち。しくこもるく。腹てある男毒先ち。うらひぬぎりをし。女の盗賊ぬり
きてり。女どもいみるとうされ。みぐうもあやふいとう。ぬものくやらぐ仕あ。れいとふ
ととおまくのれぐ。ぬせてとちうう先をう。これやどの強動と。あるあとられまいさう
て。恐怖さふ。息とと思。ぐ〜とうきそ。その男の妻ぬ。ぬしのうち。近所家。毒就
とのこうり。毒ぬふ。ぬいつけて。叱らせうと。ぬとあやぬ。毒就をかく。仲頂就を
まそ。あるたうう。それもよのが。代やうふ。あるく。ぬて。あるうち。うんぐふ。碑て。叩てあうとそ。
男。毒ぬ。貝と。毒ぬう。そのとて。まくのうんとまと。まぐ。ぐがてんぐ。ぐくまぐ。よく。腰ぬ。無
とのうまぐも。貝とさまさぬ。ぬうて。あく。奇妙ふ。ぐ。のまぐ。うぬと。稲荷さぬうら
毒。毒ぬのれぐん。毒ぬ。ぬ法とまう。ぬそ。ぬうう。ぬうぐ。ぬうう。ぬうぐ。ぬうう。ぬうぐ

まことにあはれ。清盛さまの御のこのみづからのとりこの父母まるふくあんのせいじくさまれども、この
極威ふかき車。めぐるくんげとあまてるかてせいこう兵庫へなのれてくかの樂屋の
あとをあへ人ぐーらふたりとちそうぐ代ふ往て落ぐねぐうそるたりぐ月のきて
ぐ。とてもとぞもものことをせあくまうこいぐみる板心のらきとでいるくぐ系此方
ふ落ーとてもたくべ一月中月でもらとーへ情弁とひろふとくべ海ふるふもまる
大かんたの月の祈禱かまりもせんるらうとるらる殺さぐふまアたの白及とたれ下ゆと
当ぐとあらとれが紫湯花ぐちちうるぐのうちひぐれ「あんふこれいうまま商紙りとてーも
ゆるる殺生とぐせぐふまむのいまぐくらいれども助けさるのうんで多備れてふ法で
ものくーぬ「くぐぐふくのもとてたきてちいうぐ月のつまる「るるふぐ一だんあやまくと
ぐよあろーる往女肇いさものかくもそんるーるまえいぐーくあげようぐ一ぐ孤月月れも甘ぐ。女中老

を連さまても。女むろうんぐうう歳んと春めんかるこの板ん。ちあけくるえ人
とうちたくき「道人ふあよぐぐるの鳴を。ぐれぐーたうふ頼常ぐんとのんまるこ
ぬ石川重頼辰若いうるーく立出てえ。ゆきるけ金ちちあえ出きる。宮内
大輔。たうきの月ぢく庭とまるで。めんぐくうぐふれを。「むあんぐうこもみまん
とる。らんくうたうぐ胸中とろぐんげきれ。ちるもあるぐれど肌夜
より今朝まぐふくべきとのらこのきぐ納得づくまでこれぐーるのんくぐ当
世の人情。やそう頼改ちうぬのの田巻園隠ふ実をとんせ義ぐみかくこ
てうれとまるぐけ。女もとんぐ世ふうるてもきちーに家ふるるとかと家ふかれど
とうろに空あとあひまるんぐ殺ーそれぐーも肚かれきうんと額髪
とぐ。ぐ人ーかやも見だねべ下ぬの夜服ふまぐれとのびく。

ふ紫陽花のきくきくとひきうりのやく家内分とあくし。夜寄人寄せまちをまち。
あとをそきてと扱戸ハあを。まだらく立てやうきとさけべちりしおうあとよ
ひのまをつるるこがひせーんぞうーさぬ是ともらく本心あるこれ妻のこんまろ
肝ハまこまをふやくまをらとたのり。屋敷ハれらあつうれがつる妻ハなり
かりちーとつーー媚と献ー。清盛らを恐れ申さ。あのこのまふ歌ハを。
きこめと女とらひけれ「そんるーふをんがの方のれて書さんでどえまろ。さもく
よつがきこるからとこーの紙袍をあ他とかぐふ着ふてふうら
この湯をちやく「えんふうれーのよのこころ人ふがまを君のあとうあそとらくあ
まうるこがやうられふーそもかさあぐ。あやふのきえんと事ーもるく「かれうし
も忠孝節義。天神地祇の哀愍納受。婦徒まうこれとがこ妻ハ。そころの

ふるまひらひけうー。怒言のちハのくきうんさまこけのるそのうちハ。二人ハ
衣彼きせかんさ。辰君のるとうり重頼ハあハにあけて立ひる。紫陽花ハ。
きの墓。帯。ふりと腰ハまくこころ人かてうがふこーりと深山木。ちぎれのめと
懐剣りそつきかるとと紫陽花ハ。もあるべーと死をとさけて。危刀ハとうあ
らーぶ。若もるくちうみとうちあとー。立陽ハ。ちまそのうくる。危丁ハ下に
かきー。ちるきのこーと頭ハまこひ。ぐうとまるまバ七顔ハ倒。その者息ハこえ
こそ。ひめかふたちのるこ人を思りてのそーやう頭ハまこーまこきと
こき。衣りんハるを。と心ハ男さを。目ーこーこーうて長煙管。火をけのうづを。
かきあこーーげむり。輪ふふくあちつるぐれ。この時ハつ間よりたちいづるこーめと猫
壹天目と。斉眉。あとやふひぎまづて紫陽花のまへふるり「これさせられぬ所

離者適會
吉人天相

辰若

石川雷頼

低頭たび給の床の雪吹のさよ風おはざあめ〜はなみ
おろしさて〜出ぐ手
おくゆとれ基子の湯のたぎりてあり。ふてる者多くえれど。お条やそあふめ。あ
ぐさう生と長ぐ生ぐさうぐ。深山木のうえ。斜目もうらぬつらたまり〜飛
湯気のぼろとうなる。独もとめざる文金高田ごてふ似あぬおちつ死ち。心ふて
とうちまれど。もひひめせぎひまとり〜。おるる夫かりてんあれ。さて数をべ死数ぬ
けさうとそこみふ云りでんとでもすくてこあらくへ「ひあたさ面おさむ」のふさうしてお
ぞあとやーてん。ん身のさうふるりすくさん。天明る夫きごるもあり。ふくと所
寝ろりませ。お能ふさろ〜ぐ。ら混揚ふかけまする。とらく親ちくまりとれが「何
もかも知ってあるぐらやろうふ出て来ん。ちるさ殺さうたさうろうりふ食ふ茶
ゆもさごめて毎ぐるあらうぐさうんろうまの人より人自己のかくたあくめとかさんの様

幼ろ〜りちやく。脳のと目がけつんとまるとひらうとあるとうく「ふる
うらるうらばせひるけれどやーふいひやくの所殺生ぎとてあるて間ふふうり
ふ人いかーぐきの。其中もひんてあるる見れどぐれもうとて〜と間復中。あとき見とまの
沐山木とひとろふ知り〜めるて〜。おるさけるいとトスあ。骨ぐお舎利ふるうとそ
もあるさいどうぐまでも。紛れもるの辰若さ。これまでふ面たぐ。実娘〈実ふの家
やづ人やスぐ右ふ生のやるうおたあ。おふいせ。ふとあつきみそ。誓ふ云ふそもあん。
うがひふ知さうとふろ〜。捕とやス粗朴のめ。かめりけられて下さりませやーさど
るえがたろあいみ。おうとふもせよ歴くの。れ息女ふるりひとり身ぐ。踊もる取
大内山ふ。ふるもひとーき西八條のれやるさへのみやつ人ふうーどもグれ関ふあ
さいかるこうるこのお郷会もるからうやいふ。とうるまそ裳湯気ふるもち

さこう。縁ゑんをやくりけ。べつ。ちう度ど〜〜「さう以ぐ。ごえんるるの。貴人きうの位のゑ。ま人がるらう
とおのの人一名。十一二うら。漢書学文人おかく〜てきらうこれと。秋のゑ。ま辰巳
さんふ。るらうこともおのらねば。ゑふ。あくさう。秋いもあぎすて〜ゑ。ゑに。ま。が。つき。
あるやうにちとあ。恋。そうとあふ。秋をよむ。りのがあるうら。と〜くたる。きうと。他
ゑん
言とゑやうあるうら。殺さあう人ふ。藤くせう。のや〜ゑ。ま。ふ。とあをさうてげ〜〜き
やどでも。心ふ。そむ。ま。ゑ。れ。ぐあらど。二言とゑ。せ。ゑ。その。ゑ。殺。ぐよのま。そのま。ま
でゑやとゑ。ま。ゑ。とうせねど。捕もあそうく。氣〜ゑ。ゑ。ゑのゑ。ま。とゑ。て。ま。せう。孫
秋のるるらちうとう〜。ま。そう〜。ふ。海ゑと。ま。ゑ。ゑ。ゑ

のんでいまち。八ツ半。まで。ふまく。二年。ぶまのうそや。乳酪。でつあく。の茶。ぐあつ。人。死。

寿妙。ふとのこと。とる。一。そこ。あ。死。ぐい。次。人。死。頭。死。とひろう。もれ。べすが。のう。

男。あ。ぐ。死。ぐ。もう。兄。御。を。解。こう。みつ。る。一。ねむ。と。後。かつぎ。て。あ。よ。

こ。ち。軽。て。き。こ。ふ。ぶ。ぶ。こ。ど。う。絹。布。産。真。こ。こ。そ。る。う。情。そ。う。こ。

ぎ。ぶ。こ。て。こ。ま。く。ぶ。ぶ。や。ー。元。自。己。と。う。ま。れ。脆。鳥。国。南。の。こ。を。汚。て。九。万。里。ふ。羽。茨。

の。き。心。ち。世。上。の。人。と。崇。と。ん。で。ー。大。ぐ。ん。ぶ。そ。元。の。妖。婦。雲。陽。花。福。寿。ぶ。ひ。る。

の。ち。ま。こ。ぶ。る。結。う。ま。る。第。二。編。ふ。細。説。ま。ー。

繡像十三葉 一陽齋豊國画

朝倉研八刀

発行書林

大坂

綿屋喜兵衛
出雲寺萬次郎
須原屋茂兵衛
山城屋佐兵衛
小林新兵衛
山崎屋大助
英大伊八
須原屋伊八
岡田屋嘉七
和泉屋市兵衛
山崎屋平兵衛
山口屋清兵衛